（別紙様式2）

令和５年度　学生による地域フィールドワーク研究助成事業

研　究　成　果　報　告　書

・機関及び学部、学科等名　富山大学都市デザイン学部都市・交通デザイン学科
・所属ゼミ　自主プロジェクト ふふっと富山のフォトマップ
・指導教員　猪井博登
・代表学生　小池浩希
・参加学生　坂江春多、竹内栄作、中原真大、藪下寛朗

【研究題目】 文化財の活用とシビックプライド醸成を目的とした写真撮影と共有法の検討
―ふふっと富山のフォトマップの滑川市文化財への適用―

1. 課題解決策の要約

計 8 回にわたる現地調査により撮影した写真を元に、オンライン上の文化財マップ「滑川文化財マップ」と冊子を作成した。また、2022 年から公開しているふふっと富山のフォトマップやふふっと富山のフォトマップの SNS、写真展を通じて滑川市の文化財の紹介を行った。こうした取り組みで滑川市にある文化財の有効な活用法として、写真撮影と共有を提案するとともに、文化財の広報活動を行った。それにより、滑川市の文化財の認知向上とシビックプライドの醸成が示唆された。

また、SNS に投稿された写真や、アンケートなどから、文化財の活用とシビックプライド醸成を目的とした写真撮影と共有法の検討を行い、文化財活用や広報に関しての提言を行った。

2. 調査研究の目的

本研究は課題研究部門であり、滑川市から課題として提示された、「文化財の活用について」の課題を解決するため、2022 年から活動をしているふふっと富山のフォトマップを滑川市文化財へ適用し、文化財の活用とシビックプライド醸成のための写真撮影と共有法の検討することが目的である。また、これらの活動を通し、市が課題としている広報に関しての課題に対しても提言を行うことを目指す。

3. 調査研究の内容

滑川市内にある文化財や関連する施設について、メンバーによる現地調査を行い、撮影を行う。そこで撮影した写真や調査結果を基に、オンラインマップ、冊子の作成、写真の公開、写真展の開催、SNS での文化財紹介などに取り組む。さらに、滑川市の文化財に関する SNS 上の投稿を調査するとともに、文化財に対する意識や文化財の活用法に関するアンケートを行うことで、文化財の活用とシビックプライド醸成のための写真撮影と共有法の検討を行うとともに、広報に関しての提言をまとめる。

4. 調査研究の成果

4-1. 現地調査

文化財ごとの写真の撮影や、市役所、博物館での打ち合わせ及び見学のため、計 8 回の現地調査を行った。以下に現地調査を行った日程と概要を記す。

・ 1 回目（2023 年 4 月 19 日）
滑川市役所、ほたるいかミュージアム訪問
瀬羽町周辺、養照寺、立山・大岩道しるべ、小沢家住宅店蔵、廣野家住宅主屋、廣野医院の撮影
・ 2 回目（2023 年 4 月 23 日）
千鳥遺跡、立山杉の古木、東福寺焼窯跡、岩城家住宅、門松、一里塚の撮影
・ 3 回目（2023 年 5 月 11 日）
滑川市立博物館訪問、東金屋たたら製鉄場跡の撮影
・ 4 回目（2023 年 7 月 21 日）
常夜灯、滑川館、田中小学校旧本館、句碑（有磯塚）の撮影
・ 5 回目（2023 年 7 月 31 日）
滑川のネブタ流しの撮影
・ 6 回目（2023 年 10 月 12 日）
旧宮崎酒造の撮影（酒蔵アート in なめりかわ 2023）
・ 7 回目（2023 年 11 月 3 日）
銀杏の古木、本江遺跡の撮影
・ 8 回目（2023 年 11 月 23 日）
銀杏の古木の撮影

図 1　滑川市役所訪問時の様子

図 2　滑川市立博物館訪問時の様子

現地調査より、イベント開催や「宿場回廊巡りマップ」などで活用に力を入れている瀬羽町などの北陸街道沿いの建物群以外にも、魅力的で興味深い文化財が市内に存在していることがわかった。調査中に文化財を撮影していることで、市民の方がカメラを向けるなど、その文化財に注目する姿もあった。また、ネブタ流しではカメラを使って撮影する人だけでなく、スマートフォンなどで撮影している人も多く、写真を趣味としない人であっても撮影したいと思える文化財であることが分かり、シビックプライドにつながる文化財であることが示唆される。

なお、この文化財の現地調査においては、自動車は使用せず、公共交通機関（鉄道及び滑川市コミュニティバス「のる mycar」）と徒歩を交通手段とした。これにより、市内公共交通機関を利用した文化財の周遊についても調査することができた。SNS などでの紹介の際も最寄りのバス停だけでなく実際に調査に使用した路線のバス停も表記するようにした。例えば、銀杏の古木がある西光寺に行く際、最寄りのバス停は大日室山ルートの「大崎野」であるが、運行間隔が 2 時間程度であり、銀杏の古木を撮影するだけでは時間が余ってしまう。そのため、徒歩 10 分程度の「大崎野北」バス停を利用すると、効率よく文化財を巡ることができる。こういったコミュニティバスの使いこなしなども、現地調査でわかったことなどを SNS などで紹介する際に活かした。

4-2.オンラインマップの作成・更新

滑川市から公開されている文化財の所在地は住所のみである。そのため、現地調査を行う中で、インターネット上の地図などに登録されていないものや登録場所が間違っているものが多く、住所のみでは土地勘がないメンバーは巡るのに苦労した。そこで、ふふっと富山のフォトマップで 2022 年から活用している、Google マイマップ機能を利用し、「滑川文化財マップ」（https://goo.gl/maps/tYQzufXR59W3vcca7）を作成した。文化財の位置は、現地調査で確認した詳細なものを地図上に登録している。また、文化財の中には、書跡・考古資料・歴史資料などのように、個人所有のものや一般の写真撮影に適さないものもあるため、図 3 のように、撮影が容易な文化財と難しい文化財を色別に変えて表示させている。さらに、現地調査で実際に訪れ、メンバーが写真を撮影した場所に関してはカメラのマークに変更し、写真を掲載した。文化財ごとに、図 4 のような文化財の基礎情報や、説明、写真情報、アクセスなども登録している。これにより、スマートフォンの Google マップ上でも滑川市内にある文化財の位置や説明、写真を見ることができるようになり、土地勘がない観光客はもとより、市民の方々にも普段気づいていなかった文化財に関して再発見できるようになったと考える。

図 3　滑川文化財マップ

さらに、マップに登録した、現地調査でメンバーが撮影した写真に関しては、オンライン上で配布しており、クリエイティブ・コモンズ【表示 4.0 国際】ライセンスに従ったうえで、営利目的を含め、自由に複製・改変して利用が可能である。これにより、様々な場面で滑川の文化財の写真が利用できるようになっている。

合わせて、2022 年から公開している、ふふっと富山のフォトマップでも、他に登録されているものとはアイコンを変えてメンバーが撮影した写真を登録している。

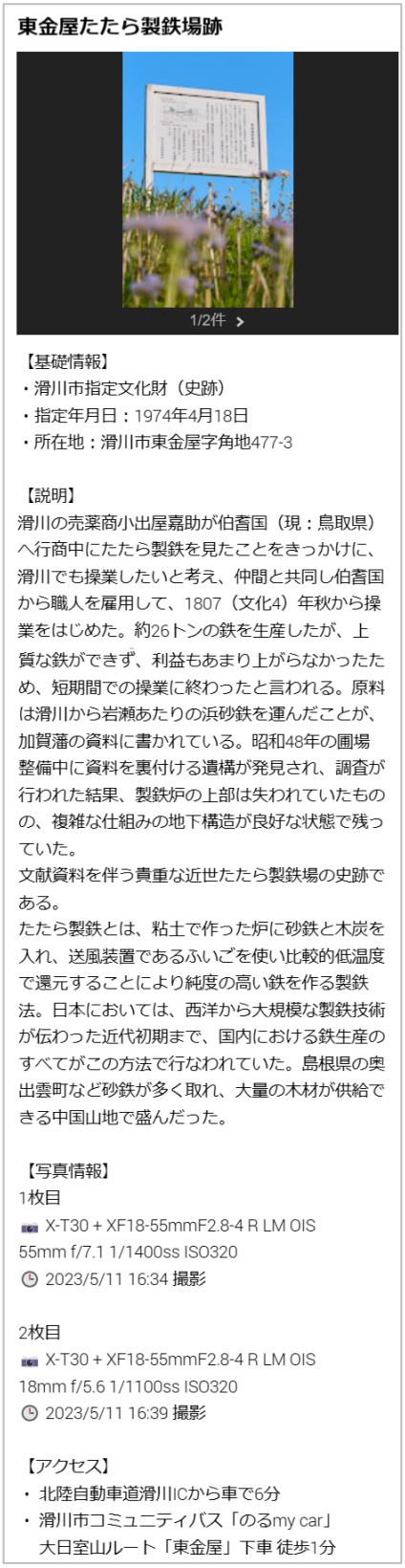

図 4 文化財ごとの登録情報

4-2. 冊子の作成

図 5　冊子の表紙（左）と p6、p7（右）

現地調査で撮影した写真をもとに、オンライン上で公開している「滑川文化財マップ」を凝縮した、A5 サイズ、8 ページの冊子を作成した。瀬羽町周辺、市街地周辺、市南部にエリア分けを行い、図 5 の右のように、それぞれのエリアでの文化財の地図を掲載し、文化財ごとに写真と説明を掲載している。なお、説明の文章は滑川市のウェブページや、文化財に関連する書籍を参考にメンバーが作成し、滑川市立博物館に校正を依頼した。

さらに、滑川市イメージアップキャラクターのキラリン、ピッカを紙面に登場させ、対話形式で説明させることにより、文化財という少し堅苦しいものを題材とする冊子でも、分かりやすく親しみやすいものになるように心掛けた。

作成した冊子は、滑川市や滑川市立博物館、滑川市観光協会などに納品し、研究期間後も市内で配布してもらうことを想定している。広く市内で配布してもらうことで、観光客のみならず市民にもこの冊子を見てもらうこと

ができるのではないかと考えている。これにより観光資源としての文化財の活用や、市民の文化財の再認識により、シビックプライドの向上するのではないかと考える。

4-3. SNS 発信及び SNS 調査

文化財の発信についても課題とされていたため、2022 年 12 月から運用を開始した、2024 年 1 月 29 日現在、1003 人のフォロワーを持つ、ふふっと富山のフォトマップの Instagram 及び、234 人のフォロワーを持つ X(旧 Twitter)で図 5 のような「滑川文化財紹介」といった投稿を行った。本研究では、Instagram に焦点を置き、それぞれの投稿や、一般投稿での滑川市の文化財に関しての投稿について考察する。2023 年内に投稿を行った文化財及びその投稿日と各投稿のいいね数は表 1 に示す。なお、2024 年においても 1 月 15 日に廣野家住宅主屋・廣野医院、1 月 29 日に瀬羽町の建物群の紹介を行ったが、投稿日から日が浅く、過去投稿との比較には向かないと判断し、今回の SNS 発信における考察からは除外した。

図 6　SNS 投稿の例（「Vol.7 本江遺跡」・「Vol.3 門松」・「Vol.9 銀杏の古木」）

各投稿のいいね数を比較すると、ネブタ流し、銀杏の古木などが人気であることがわかる。ネブタ流しに関しては、写真の被写体として市民の関心も高いことがうかがえる。また、銀杏の古木に関しては、投稿時期が紅葉シーズンであり、季節性があったことによるものだと推察される。13 回の滑川文化財紹介の平均いいね数は 77 であり、この期間 28 回投稿した通常投稿と比較すると、約 35 いいね少なかった。

No.	文化財名	投稿日	いいね数
1	櫟原神社	2023/6/19	74
2	ネブタ流し	2023/8/28	108
3	門松	2023/9/11	88
4	岩城家住宅	2023/9/25	69
5	一里塚	2023/10/10	64
6	句碑（有磯塚）	2023/10/23	61
7	本江遺跡	2023/11/6	72
8	小沢家住宅店蔵	2023/11/20	72
9	銀杏の古木	2023/11/27	92
10	立山杉の古木	2023/12/4	74
11	東金屋たたら製鉄所跡	2023/12/11	82
12	千鳥遺跡	2023/12/18	70
13	立山・大山道しるべ	2023/12/25	75

表 1　SNS 投稿の投稿日といいね数

一般投稿では、なめりかわランタンまつりや酒蔵アート in なめりかわ 2023といった「写真映え」するようなイベントで撮影された写真が多い。そのため、そうしたイベントが多く開催されている旧宮崎酒造の投稿が目立った。それ以外では、現地調査でも撮影している人が多かったネブタ流しをはじめ、銀杏の古木といった季節性のある被写体や、おおかみこどもの雨と雪の聖地としても知られる田中小学校旧本館などが投稿されていた。

一方で、写真の構図に文化財が入っているのにも関わらず、それが文化財であると認識せずに、風景の一部として投稿されているものも見かけられた。写真の被写体として十分な魅力があるのにもかかわらず、文化財として認知されず、ただの風景の一部として切り取られていることが分かり、文化財の存在を発信することの重要性が示唆される。

4-4. イベント開催

図 7　展示会の様子

図 8　パネル展示の様子

2024 年 1 月 21 日には、中滑川複合施設メリカで写真展を開催した。21 枚、18 カ所の現地調査で撮影した写真を A3 パネルに印刷し展示した。また、写真の隣には文化財の説明、地図などの情報も載せ、展示している写真などがダウンロードできるように QR コードも掲載した。また、完成した冊子を配布し、A2 サイズで作成した冊子のパネルも展示した。

当日の来場者数は 103 人であった。午前中の来場者が多かったが、これは会場のメリカで、11 時から子供たちを対象としたもちつき大会があったことによるものであると考えられる。そのため当初想定していたよりも、多くの人がメリカに訪れており、結果として多くの市民に写真を見てもらうきっかけになるとともに、多くの年齢層に来場してもらうことができた。来場者からは、「滑川市民だけど、こんな文化財があったなんて知らなかった。」「展示会の後に早速文化財を見に行きたい」などのコメントが寄せられ、市民をはじめ、展示会に来た人に文化財を再認識してもらうきっかけになったと推察される。以前から広報されている瀬羽町周辺の文化財やネブタ流し、天然記念物などは存在を知っている人も多い印象だったが、史跡などは「知らなかった」という声が目立った。

この展示会を通し、知らない文化財を知ってもらえただけでなく、日常的に見る文化財でも、写真というコンテンツを通して少し視点を変えることにより、市内にある文化財が印象的になることで、シビックプライドを向上できたのではないかと考える。

4-5. アンケート調査結果

アンケートでは、文化財に対する意識や興味のある文化財の活用法、滑川市に対するイメージを調査した。このうち、興味のある文化財を活用する取り組みとして最も多かったのは文化財を活用する SNS であった。また、自由回答では、「文化財と、現代カルチャーを MIX したイベント」や「デジタルを活用したスタンプラリー」などの意見があった。また、滑川市のイメージでは、ほたるいかが 18 人中 17 人の約 94%であり、滑川市と言えばほたるいかというイメージが大きいことが分かる。次いで瀬羽町の宿場回廊が 18 人中 7 人の約 39%だった。これら以外の文化財に関しては、名前が挙がっていないため、滑川市を代表するイメージにはなっていないと考えられる。

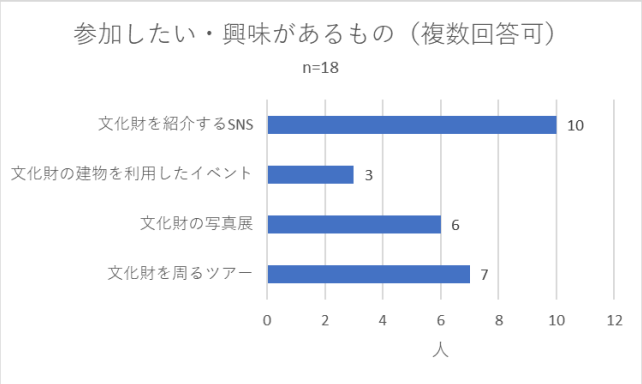

図 9　実施したアンケートの結果

5. 調査研究に基づく提言

本研究では、滑川市の文化財をふふっと富山のフォトマップで培った、写真撮影と共有法を適用し、文化財の活用及びシビックプライドを醸成することを目的に、現地調査と冊子の作成、SNS 発信、写真展の開催などを行った。それによって得られた結論と提言は以下の通りである。

現地調査の結果から、活用に力を入れている瀬羽町などの北陸街道沿いの建物群以外にも、魅力的で興味深い文化財が市内に存在していることがわかった。一方、所在地が分かりにくい文化財も多かったため、本研究

で作成した「滑川文化財マップ」の利活用により、文化財の正確な位置が分かるようになり、今まで注目されていなかった文化財においてもめぐりやすくなったと考えられる。

冊子の作成や写真展の開催、SNS での文化財の紹介では、市民も認知していない文化財を紹介や、写真を通すことによる新たな視点の提供により、地元の魅力を再発見させ、シビックプライドの醸成や文化財の認知度向上につながったと考えられる。また、市外の人々に対しても、観光需要の創出などができたと考えている。

また、現地調査での公共交通機関の利用を通し、市内公共交通機関の利用をした文化財周遊といったコンテンツも開催可能なのではないかと考える。アンケート調査でも文化財の活用法として文化財を周るツアーなどを求める人も多く、集客力の高さが示唆された。これは、文化財活用はもとより、公共交通機関の活性化という意味でも効果を上げることが期待される。

SNS の調査では、一般の人から一定数の文化財を被写体とする投稿があったことが分かった。市の広報力に限界があったとしても、こうした一般の投稿を市のアカウントが紹介することにより、効率的な広報ができると考える。また、そうした紹介により、シビックプライドの醸成も期待される。そのために、継続的に使用できる市内で撮影された写真につけるハッシュタグの作成などが必要であると考える。加えて、銀杏の古木では、メンバーの現地調査で紅葉のタイミングで撮影に行くことが難しく、SNS でも同様の意見が見られたため、桜や紅葉といった文化財にも関係のある、季節に関係するものなど関しては、地域から発信するとより撮影者が増えると考えられる。

また、イベント時に投稿数が伸びることから、文化財の写真を撮りに行きたいと思わせる取り組みは、文化財を活用し文化財を認知してもらうために大事な取り組みであることが示唆された。さらに、単発的なイベントだけでなく、景観的な側面のハード整備を行うことで、文化財全体の魅力を上げ、より写真を撮影して共有したいと思わせる文化財になり、活用が進むのではないかと考える。例えば、天然記念物である門松には、電線がかぶってしまっている。また、瀬羽町周辺も建物が残るだけで、道路舗装や周辺景観などに、旧北陸街道の宿場町としての雰囲気づくりに寄与する取り組みはなされていない。実現には多くの障壁があると思われるが、無電柱化や道路の石畳化など進めるため、文化財周辺の景観も守るための景観計画や、トータルデザインなどを検討すべきであると考える。

しかし、書跡・考古資料・歴史資料のような文化財は、個人所有であったり、一般の写真撮影には向かなかったりする文化財があるため、写真撮影による文化財の活用には限界があることも分かった。

加えて、現地調査やアンケートから、市内には室山野用水や五里堤といった、文化財登録されていなくとも、市民に親しまれている土木構造物があることが示唆された。文化財指定には一定の要件を満たす必要はあるが、市民に親しまれているものが文化財指定されることにより、文化財への興味関心が増すうえにシビックプライドも向上するのではないだろうか。

6. 課題解決策の自己評価

本研究では、複数回の現地調査とそれを基にしたマップ、冊子の作成、SNS 投稿、写真展の開催により、多くの人に様々な文化財を紹介でき、写真というコンテンツを軸にした文化財の活用とシビックプライドの醸成を行うことができた。特に、2022 年から活動してきたふふっと富山のフォトマップでの経験を活かし、ふふっと富山のフォトマップの滑川市文化財への適用による SNS での調査やマップ作成、写真配布などが行え、写真撮影と共有法の検討を行えた。これにより、ふふっと富山のフォトマップの活動を適用し、市民とともに写真撮影と共有を行うことは、文化財などの地域資源を活用・広報する際に一定の効果があるものとして提案できると考える。

一方、現地調査の遅れや、同様のイベントの開催などにより、イベント内容を変更せざるを得なかった。また、SNS 投稿において、事前に設定したハッシュタグがあまり浸透せず、想定していた投稿数が集まらなかった。シビックプライドの醸成という点も、写真展などの開催で一定の意見を集めることはできたが、市民に対するアンケートなどが行えなかったため、定量的な評価ができなかった。しかし、冊子は研究期間後も配布を行う上に、今回作成した滑川文化財マップや SNS 上の投稿は今後も公開を続けるため、滑川市の文化財の活用及び広報に一定の効果をもたらすと考えられる。

【謝辞】
本調査においては滑川市、滑川市立博物館にご協力いただきました。深く感謝申し上げます。